

注) この RCT は日本東洋医学会 EBM 委員会がその質を保証したものではありません

10. 呼吸器系の疾患 (インフルエンザ、鼻炎を含む)

文献

本間行彦. 有熱かぜ症候群患者における漢方治療の有用性. *日本東洋医学雑誌* 1995; 46: 285-91. [CiNii](#)

1. 目的

有熱かぜ症候群患者における漢方治療と消炎鎮痛剤 fenoprofen の有効性の比較評価

2. 研究デザイン

ランダム化比較試験 (封筒法) (RCT-envelope)

3. セッティング

北海道大学保健管理センター

4. 参加者

かぜ患者 246 名のうち 37 度以上の有熱患者 (北海道大学の学生) 80 名

5. 介入

Arm 1: 漢方薬エキス製剤 (メーカー不明) (葛根湯 18 名、麻黄湯 9 名、桂麻各半湯 3 名、竹筴温胆湯 2 名、小青竜湯 1 名、桂枝加芍薬湯 1 名、香蘇散 1 名) を 7.5g 又は 9.0g 3 x 随証投与 35 名

Arm 2: fenoprofen 投与群 1200 mg 3x 45 名

6. 主なアウトカム評価項目

発熱の持続期間、発熱の経過期間における有熱者の割合、発熱の再燃、かぜ症状の持続期間

7. 主な結果

発熱の持続期間は Arm 2 の 2.6 ± 1.7 日に比較して Arm 1 では 1.5 ± 1.9 日と有意に短かった ($P < 0.001$)。また有熱者の割合も Arm 2 は Arm 1 に比べて有意に高かった。かぜ症状の持続期間でも Arm 2 は Arm 1 に比べて長かった。

8. 結論

漢方治療は消炎鎮痛剤 fenoprofen に比較して有熱かぜ患者に対してより有効性が高い。

9. 漢方的考察

有熱かぜ患者への漢方方剤の投与は随証治療によって行われた。

10. 論文中的安全性評価

記載なし

11. Abstractor のコメント

本論文は漢方治療が消炎鎮痛剤 fenoprofen に比較して有熱かぜ患者に対してより有効であることを示した興味深いランダム化比較臨床試験である。本試験は封筒法でかぜ患者 246 名を 2 群に割り振っている。その中から比較試験の対象となる有熱患者 80 名を抽出している。封筒法による割付がなされている点、ランダム化の保持が弱くなる事が多いが、2 段階抽出も加わっている。この点の改善及びプラセボを加えた今後の検討が期待される。

12. Abstractor and date

岡部哲郎 2008.08.18, 2010.6.1, 2013.12.31